

## 序章 < 沖縄 > をめぐる新しい研究視点の構築

### (1) 基地と観光のパラレルワールド

全国的な < 沖縄 > 人気は、いまや完全に定着した感がある。県産品のゴーヤーは、すでに「にがうり」ではなく、沖縄方言の「ゴーヤー」として、人々の食生活に浸透してきている。他にもモズクや紅いもなどの沖縄食品は、健康意識の高まりを背景としてブランド化されつつある。音楽に目を向ければ、THE BOOM の「島唄」フィーバーは、発売後 10 年たってまた再燃している。その一方で沖縄のインディーズバンド・モンゴル 800 は、当事者も予期せぬほどの全国的なメガヒットを飛ばした。奄美出身の元ちとせの登場とも相乗効果をなして、日本の音楽シーンのなかで < 沖縄 > は、形を変えながらも常に一定の存在感を示すようになった。こうした消費文化において < 沖縄 > は、もはや「沖縄ブーム」という表現がふさわしくない段階にまで、日常化・恒常化が進んだように思われる。

その一方で、沖縄の米軍基地をめぐる問題も、枚挙に暇がない。普天間基地移設をはじめ、基地の返還・縮小への道は、相変わらず難航が続いている。米軍関係の事件は、日々県内マスコミによって取り上げられている。また、2001 年の 9.11 同時多発テロは、「沖縄は基地があるから危ない」という風評を全国に広め、観光関連をはじめとする県内産業に大きな打撃を与えた。だが、これに対して県や政府の対策も始まり、「だいじょうぶさあ～沖縄」キャンペーンによって、「元気な明るい沖縄」をアピールした（補論を参照）。こうしたテロによる即発的な影響や、その後のキャンペーン的リアリティが浸透するプロセスはまさに、沖縄において軍事基地と観光リゾートが互いに並立し、それぞれがパラレルワールドをなしていくようなリアリティの二重性を、典型的に表している。

沖縄は「基地の島」であると同時に、「観光の島」でもある。県の観光収入は年間 4,000 億円を超え、県外受取額の 17-8% に達しており、その規模は他の産業をはるかに上回っている。観光はまさに、沖縄県の基幹産業としての位置を確立した。だがその一方で、このせまい島の空間には、基地のリアリティが広大な面積を占めてもいる。そこで、沖縄が観光立県であるために不可欠となる条件は、「安全性」や「快適性」の確保であり、また「安全で快適な沖縄」というイメージづくりであった。「だいじょうぶさあ～沖縄」キャンペーンは、まさにこの「安全で快適な沖縄」というイメージを、全国に向けて大量に発信していたのであった。

そして、実は後に見るように、こうした沖縄イメージの演出は、1972 年の日本復帰以来の 30 年間、沖縄が著しい観光リゾート化の道を進んでいくなかで、一貫して重要な課題であり続けてきたのである。それは、沖縄をめぐる基地の現実が、復帰後も変わらず温存されたこととも、パラレルな関係にある。すなわち、< 青い海 > に代表される沖縄イメージは、基地の現実と観光リゾート化の現実を、別次元のものとして分断する、象徴的で政治的な機能を果たしてきたのである。もちろん、基地の現実と観光リゾートの現実は、沖縄のせまい島空間の中で互いに接近し、しばしば影響し合う関係にもあったわけだが、こうした沖縄イメージの媒介によって、両者はあたかも無関係であるかのように並立してきたのである。私は沖縄のこうした状況を、パラレルワールドの並立、またリアリティの二重性と名づけ、本論の基本的なパースペクティブの一つとしたい。そして、こうした沖

繩のリアリティの二重性<sup>1</sup>の成立に重要な機能を果たしてきた沖縄イメージを、本論の対象として取り上げたい。

すなわち、本論の主題・目的は、「復帰後の沖縄において、沖縄イメージがいかにして形成され、それが沖縄の新しい現実をいかなる形で構築することになったのか」を、明らかにすることである。この主題を、第1部では沖縄振興開発計画、第2部では沖縄海洋博、第3部では観光キャンペーンの内在的な検討の中で、それぞれ展開していくことになる。

本論では主に、沖縄イメージが体系的に構築されることになった1970年代に焦点を当てていく。この時期にこそ、復帰と海洋博という互いに連動し合う二大イベントを軸にして、<沖縄>に対して著しいテーマ化のまなざしが向けられ、観光リゾートとしての沖縄イメージの基盤が確立されてくるからである。後述するように、その後、現在に至るまでの沖縄イメージの基本要素は、ほぼこの時期に出そろっていたと言っても過言ではない。本論では対象時期を70年代にしばり込むことによって、復帰後～現在の沖縄イメージのエッセンスの部分を、その歴史的構築の様相において明らかにすることができる。

## (2) 沖縄研究と沖縄イメージの研究

このような復帰後の沖縄イメージに関する社会学的研究は、今日の沖縄をめぐる状況を考える上で、非常に重要な素材を提供するはずである。だが実は、先行研究を見る限り、沖縄イメージそのものを内在的・体系的に扱った社会学的研究は、一部を除いて<sup>2</sup>、まだほとんど行われていないのが実情である。これは、本論第2部の沖縄海洋博の内在的分析、第3部の沖縄観光キャンペーンに関する研究も同様である。

もちろん、沖縄研究に関して言うなら、これはあらゆる分野にわたって膨大なすぐれた研究の蓄積がある。特に、開発・経済・政治・基地問題・沖縄戦・運動・農村・都市・家族・社会意識・歴史・文化・移民・エスニシティなどの諸領域に関する社会科学的研究は、沖縄に関してすぐれた知の蓄積を積み上げてきており、<sup>3</sup>本書もこれらから多くのことを教わっている。

だが、これまで沖縄研究は大量に行われてきたが、沖縄イメージの研究は、まだほとんど行われていない。なぜだろうか。沖縄イメージはいまや、沖縄の現実を新たに構築する力をもつと同時に、沖縄イメージそのものが、沖縄をめぐる現実の一面を構成している。これが研究対象として不問に付されてきたことは、やや意外でもある。

これはまず、戦争・基地・運動・開発など、沖縄固有の現実が、日本の中でもあまりに特異で濃密であったことが大きいのではないだろうか。実際、従来多くの研究が、沖縄の独特な現実に焦点を当ててきた。

だが、それだけではない。これまで沖縄イメージの研究が不問に付されてきたことは、実はそれ自体が、イメージそのものとのらえがたい特質を証拠立てているのではないだろ

<sup>1</sup> もっとも、「リアリティの二重性」は、必ずしも基地の現実と観光リゾート化の現実の並立状況に限定して用いられるべきものではない。実際第6章では、海洋博会場内のイメージ世界と、会場外の沖縄社会の変容とのパラレルな現実を指すためにも用いている。だが、<基地/観光>の二重性の側面を特に強調するのは、復帰前の米軍統治時代に支配的な座を占めていた基地のリアリティが、こうした二重性にとって代わられていく面を重視するためである。これに関して、伊江島をめぐるリアリティの変容については第4章を、基地依存経済から観光立県への急激な経済構造の変容については、第7章を参照。

<sup>2</sup> 田中、2002などを参照。

うか。我々はここでもう少し、最近の沖縄イメージに焦点を当てながら、イメージそのものの特質について考え、その研究視点を探っていくことにしよう。

### (3) < 青い海 > のビジュアルな沖縄：大学生の < 沖縄 > 表象から

最近の沖縄イメージの全国的浸透の特別な契機としては、2000年7月の九州・沖縄サミットや同時期の首里城2000円札の発行、2001年4月～9月のNHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」の放映（詳細は補論）が挙げられる。サミット報道や「ちゅらさん」においては、沖縄の< 青い海 > や沖縄独特の文化といったイメージが、かなりビジュアル的に強調されていた。こうした報道が全国的な沖縄への関心を呼び、< 青い海 > のリゾート、健康食品、泡盛、三線などの人気につながっていく。

もっとも、実際に沖縄に住んで生活している沖縄県民の中には、こうした状況に対して、自分の生活実感とのギャップ、違和感を抱く人も多い。そこで私は試みに、「ちゅらさん」の放映が始まった4月、琉球大学で担当する授業で、「ちゅらさん」の1シーンと、九州・沖縄サミットのレセプションで上演された安室奈美恵の「ネバーエンド」や伝統芸能のビデオを学生と見て、検討してみた。学生の感想の中には、「どうも出演者のウチナーグチに違和感がある。」「いたる所で、不必要に背景に海が出てくる。」「南国、リゾートというイメージを映像化して、沖縄を単純化しすぎている。」「離島の浜辺で三線弾いて踊るなんて、沖縄の人はしないだろう。すべて本土色に脚色されていると感じた。」「どんどん沖縄のイメージが外から創られているような気がして、沖縄に住んで生活している私にはギャップを感じた。」といったものがあった。<sup>4</sup>このように、< 沖縄 > をめぐって「イメージと実際とのずれ」として感じられる現象が生じている。こうした主観はそれ自体が、社会学的考察の対象になりうる現実である。

一方、本土の人々にとって、< 沖縄 > はどのように映っているのだろうか。私は2001年5月に、東京の大学生・大学院生148名の協力を得て、「沖縄のイメージ」について、簡単な自由回答式のアンケートを実施した。その目的は、「東京圏に住む人たちにとって< 沖縄 > がどのように映っているのか」、その一参考資料を得ることであった。「『沖縄』というと、具体的にどんなイメージが思い浮かびますか。」という自由回答式の質問に対しては、148人中89人、約6割の人が「海」について直接的に言及している。<sup>5</sup>特に多いのが「青い海」「海がきれい」である。「日本で一番きれいな海がある。」とまで言う人もいる。「海がきれいで、砂浜が白くて、青い空がある。」と、< 青い海 > を< 青い空 > < 白い砂浜 > と結びつけたり、< 赤いハイビスカス > の南国イメージと結びつけて語ったりする人もいる。

<sup>3</sup> これらのうち代表的な文献については、山本・高橋・蓮見編、1995、p.1-3の紹介を参照されたい。

<sup>4</sup> もっとも、琉大生の感想も、必ずしも否定的な意見だけではなく、肯定的にとらえている人もいる。また例えば、「本土の人はこれを見て沖縄の日常だという印象をもつかと思うところわい。しかし、その印象・イメージは決して悪いものではない。実生活とのギャップはあるが、本土の人がもつ沖縄のイメージや文化についてあらためて気付き、考える沖縄の人もいるので、やっぱりビジュアル化される沖縄って面白い。」「実際の沖縄の生活と違った、作られたイメージだとは、あまり感じなかった。キレイな海、青い空っていうのは、ウチナーンチュの私でもそのイメージがある。でも沖縄を語るときにそれだけっていうのはさみしいな～と思うので、そのイメージから興味を持ってもらって、本当の沖縄を知ってほしいのも良いのでは。」などの意見は、< 沖縄 > イメージをめぐる現状をもう一歩突っ込んで考えている点で、注目に値する。

<sup>5</sup> もちろんそれ以外にも、直接「海」を言わなくても、「南国」「リゾート」などを挙げている人は、やはり海をイメージしている。

これらが示すのは、青・赤・白などの色彩感覚にみちた、美的な<沖縄>イメージである。沖縄の美的な側面が誇張されてとらえられるという点では、県民の日常生活のより全体的なリアリティとの間に、“ずれ”が生じるのは必然的と言えるだろう。<sup>6</sup>沖縄での日常生活と<沖縄>イメージとの二重性に戸惑う沖縄の大学生と、はるか遠くの<南の楽園>という<沖縄>イメージになじむ東京の大学生とでは、はっきりした対照性が浮かび上がってくる。

#### (4) <メディア 空間>の密接な関係と、主観的地理の遠近感覚

さて、このようにビジュアル化された<沖縄>イメージの背景には、テレビ・映画・写真雑誌・広告・インターネットなどのビジュアル・メディアへの日常的な接触があることは、言うまでもない。

ビジュアル的に演出された<沖縄>に関して、最近特に重要な契機となった代表的なものは、やはりNHKドラマ「ちゅらさん」と、九州・沖縄サミットのレセプションにおける沖縄文化の上演であろう。両者に共通する点は、両者ともテレビという映像メディアを通して、沖縄が各家庭に接続されていた、ということである。これはあまりに当たり前の前提だが、この自明性こそが、沖縄をめぐる今日の<メディア 空間>関係を考える上で、重要な前提となっている。<沖縄>イメージが全国津々浦々に流通し、浸透していることの基本前提は、映像・写真を使ったテレビ・映画・雑誌・広告・インターネットなどのビジュアル・メディア＝視覚の諸制度が、我々の日常生活や知覚のあり方のなかに、深く浸透していることである。

<本土 沖縄>間の海を隔てた、物理的・客観的な距離の遠近が、ビジュアル・メディアの効果によって、イメージ・主観の領域においては操作可能なものになる。本土においてははるか遠い南の島・沖縄が、映像の複製技術のはたらきによって空間を超えて、テレビの画面上ですぐ近くに見ることができる。主に本土にいる人々の、<沖縄>に対するイメージや身体感覚は、こうした映像・写真のビジュアル・テクノロジーと分かち難く結びついている。視覚的な複製技術があるからこそ、客観的距離が離れているのに、主観的には沖縄に親近感を感じる状況が発生するのである。

アメリカの文明史家ブーアスティンはかつて、「エキゾチックなものを、そのエキゾチック性を失うことなく日常の経験に変えることができ」<sup>7</sup>る期待を、現代人は過剰に抱えていると指摘した。「見慣れたもの」の世界のなかに、「めずらしいもの」「エキゾチックなもの」が同時に取り込まれ、消費されるような状況である。日本人にとっての<沖縄>も、同様のことが言えよう。各家庭の日常の中で、自分の身体に最も近いはずのテレビに、はるか遠くの<南の楽園>が映っている。見慣れたテレビの世界（例えば、朝の連続テレビ小説）の中に、「日本の中でも独特な沖縄の自然や文化」のエキゾチック性が演出され、それが視覚的に消費されている。<sup>8</sup>

<sup>6</sup> もっとも、東京の大学生の<沖縄>イメージも、<海>の美的なイメージのみに集約されるわけではないことも、補足して確認しておきたい。中には、基地や沖縄戦などに対する問題意識が垣間見えることも確かである。

<sup>7</sup> Boorstin, 1962=1964, 訳書 p.89.

<sup>8</sup> これとは別に、「見慣れたもの」と「エキゾチックなもの」の融合には、もう一つの側面があることも指摘しておきたい。つまり、沖縄の<青い海>や<独特の文化>のイメージはすでにある程度認知され、

ビジュアル・メディアを通じての〈沖縄〉イメージの視覚的消費は、物理的に離れた沖縄からそのイメージを引きはがして、〈沖縄〉を身近なものへと引き寄せる。しかし同時に、はるか遠くのエキゾチックな〈南の楽園〉としての距離感覚は、保持されもする。主観的地理の遠近感覚がこのように操作可能なのは、明らかにビジュアル・メディアの効果である。

#### (5) 社会学におけるイメージ研究の系譜：イメージの現実構築力

ビジュアル・メディア＝視覚の諸制度の発達とともに、空間がイメージ化され、イメージが空間に具現化されるような、イメージと空間の相互浸透が生じている。今日、特定の地域や空間を考える際には、従来にもましてイメージのはたらきを考える重要性が増している。

だが、先述したように、これまで沖縄研究は大量に行われてきたが、沖縄イメージの研究は、まだ充分に行われてはいない。なぜだろうか。常識や学問の知のなかにはたらいっている暗黙の自明な前提を、問い直してみる必要がある。ここで、イメージをめぐる社会学的研究について、若干の整理・考察をしておきたい。

そもそもイメージというものは実体がないために、とらえどころがない感じがするものである。それに我々は、「それはイメージにすぎないのであって、本当の現実とは別のところにある」といった、「イメージ／現実」＝「虚像／実像」の二分法的な発想をする傾向がある。実際、そのように考えることが妥当な局面が多いことも確かである。

しかし他方で、現代、イメージが非常に重要な役割を果たしていることも、政治やマーケティングをはじめ、各分野の常識としてよく認識されている。イメージは一概に「現実と反するもの」とは限らず、それ自体が現実を構築する力をもっているのである。

こうしたイメージの現実構築力の問題や、先述の〈イメージと実際とのずれ〉として感じられる現象を考える際に、「イメージ／現実」＝「虚像／実像」の二分法的な発想を超えて、社会学はどのような視点をもちうるだろうか。イメージ研究の代表的古典としては、リップマンの「擬似環境」論や、先述のブーアスティンの「擬似イベント」論などが挙げられる。リップマンは1922年の著書『世論』で、現実を頭の中で単純化したイメージを、「擬似環境 (pseudo-environment)」としてとらえた。そして、マスメディアによって大量に創り出される擬似環境が現実環境 (real-environment) を圧倒し、人々が単純で偏ったステレオタイプに支配されてしまう危険性を警告した。彼はすでに1920年代の時点で、〈イメージと実際とのずれ〉の問題を、鋭く指摘していたのである。

しかしその40年後の1962年、ブーアスティンはリップマンの知見を受け継ぎながらも、より高度なテクノロジーの発達の結果、リップマンが前提した「实在／表象」、「現実／イメージ」の区別そのものがもはや成り立たないような状況が生じている、と論じた。彼は、20世紀アメリカにおいては事実とメディアの関係が逆転した、と言う。すなわち、起こった事実をメディアが伝えるのではなく、逆にメディアが事実を人為的に作り出していくよ

---

「見慣れたもの」になっているわけだが、その既視感を活用しつつ、そのイメージの上に一層「本物らしい」視覚効果を施すことによって、常に「エキゾチックなもの」が演出されるのである。実は観光旅行そのものも、メディアですでに見ている観光地のイメージの既視感を前提にして、すでに見ていた風景の「本物」を追体験することで感動するという点で、同様のことが言える。

うになった。彼は、この人為的に創り出される出来事を、「擬似イベント (pseudo-event)」と呼ぶ。「すでにある客観的な現実を、主観的な表象・イメージが忠実にとらえる」のではなく、むしろ逆に、表象・イメージの方が能動的に現実を産み出していく事態である。

ブーアスティンによれば、擬似イベント化されたのは出来事だけではなく、人間も「有名人」として、また空間・場所も「観光地」として、擬似イベント化される、つまり人工的に創り出されるようになったという。では、なぜこのような事態が生じたのか。彼によれば、複製技術革命 = 写真・映像などの技術の発達によって、イメージがコピーできるようになり、マスメディアによってイメージの大量生産が可能になったことが大きい。こうしたイメージの大量増殖の結果、我々の経験の大部分が擬似イベントになってしまったと言うのである。

イメージが増殖して、我々を取り巻く情報環境を作り上げている。そのような現代社会をとらえるには、「イメージ / 現実」=「偽物 / 本物」という単純な二項対立図式そのものが、もはや有効性を失いつつある。

ただしそうであれば、ブーアスティン自身の「擬似」という形容も、もはや不適切ではないだろうか。実際彼は、擬似イベントとは切り離された別の次元に、「本当の」現実があることを想定していた。しかもそこに、「後者の体験の方が価値がある」といった、価値判断も伴っていた。この点で、ブーアスティンもリップマンと同様、「イメージ / 現実」=「虚像 / 実像」の二分法的な発想に、依然とらわれていたのである。

とはいえ、彼のイメージに関する洞察からは、さらに 40 年を隔てた今も、学ぶところが多い。特にここで注目すべきは、「ステレオタイプによる経験の人為的単純化」というリップマンの視点を超えて、「擬似イベントによる経験の人為的複雑化」<sup>9</sup>という全く正反対の視点を、ブーアスティンが提示していたことである。イメージは我々の経験を単純化するのではなく、能動的な現実構築力をもつことによって、逆に我々の社会的経験を複雑にしていく。この視点は、我々が沖縄イメージをめぐる社会的現実を考えていく際にも、有効な知見を与えてくれると思われるのである。

(6)「イメージに対する実態の優位」の発想を超えて、関係性の思考へ

すなわち、「ちゅらさん」やサミットにおいてビジュアル化され、演出されていた<沖縄>イメージは、単に県民の生活実態とのズレを示すものとして、現実を映し出さない作り物 = 擬似イベントにすぎないという見方へと、回収し切れるものだろうか？こうした連続ドラマやサミットのレセプションにおける、演出された<沖縄>イメージも、沖縄をめぐる複雑な現実の一面を形作っているとも言えるのである。

より一般的に言えば、こうである。日本復帰・海洋博以来、沖縄は日本の観光リゾートとして、「青い海」にみちた<南の楽園>の美的なイメージを割り当てられてきた。とはいえ実際には、基地問題・環境破壊・産業の停滞・高い失業率など、より生々しく深刻な諸問題を抱え続けている。このような、単純な<イメージ>と複雑な<実際>とが相並ぶ形で進行していく、パラレルな現実、これを私は「リアリティの二重性」と呼びたい。ところが、まさにこのリアリティの二重性こそが、「イメージに対する実態の優位」の常識的な

<sup>9</sup> Boorstin, 前掲、訳書 p.47。

思考を、根強く保たせてきたのである。確かに、観光リゾートとしての〈沖縄〉イメージは、実際に生活している130万人の沖縄県民からすれば、作り物にしか見えないかもしれない。しかし、それでもやはり実際に、観光は沖縄県の基幹産業となっており、年間450万人もの観光客を集めるまでに至っている（平成12年）。そして、その文脈の中では、〈沖縄〉イメージ自体が重要な経済的・文化的資源となっていることも、まぎれもない現実なのである。

つまり結局、「イメージに対する実態の優位」の常識的な思考を超えて、ブーアスティンが示した「単純なイメージによる経験の複雑化」へと、視点を切り替えていく必要がある。そして、単純な〈イメージ〉と複雑な〈実際〉が織り成すリアリティの二重性、あるいは両者の密接かつ見えにくい関係をこそ、詳細に明らかにしていく必要がある。〈イメージ/実態〉の二分法を前提して、虚像のイメージに対して実像を持ち上げるというロジックだけでは、現代社会の複雑さをとらえ切れない。〈沖縄〉イメージは決して、単に外部から押し付けられるものではない。県民生活や県内産業、自治体行政などの中にも、そうしたイメージが日常的に受容され、現実に生きられ、自分たちのアイデンティティの一部を織り成す現実的な効力をもってきたプロセスを、緻密に見ていく必要がある。

本稿は、沖縄海洋博に焦点を当てることによって、こうしたイメージと実際とのパラレルな関係性が形成されてきた歴史的過程を、政治・経済・文化の観点から細かく見ていこうとする試みである。

#### (7) 本論の基本的な視点

沖縄イメージはいまや、沖縄の現実を新たに構築する力をもつと同時に、沖縄イメージそのものが、沖縄をめぐる現実の一面を構成している。本論は、こうした沖縄イメージを対象にしようとしている。ここで、本論が立脚する基本的な視点を明確にしておこう。

社会学的な知の系譜を振り返るなら、ウェーバーやデュルケームの宗教社会学、フーコーやブルデュー、コルバンらフランスの社会史・社会学、カルチュラル・スタディーズにおけるメディア研究などの諸潮流が問うてきたのはまさに、知と現実の関係であり、表象と現実の関係であった。こうした問いを今こそ沖縄においても、イメージと現実の関係という形で、独自に立ち上げていくことは重要である。その意味で本論の基本的な視点は、これらの系譜が交差する地点に位置すると言えよう。

「現実がまずあって、それをとらえるイメージ(知)がある」といった、「現実 イメージ」「現実 知」の図式(現実実在論)を、いったんカッコに入れて、逆にしてみよう。すなわち、「(特定の文脈の中で立ち上げられた)イメージ(知)が、新しい現実をつくる」という、「イメージ 現実」「知 現実」の図式(現実構築論)に切り替えるのである。これによって、沖縄の〈青い海〉や〈南国〉〈文化〉など、それまで当たり前「ある」と思われた自明な領域が、実は人為的・社会的につくられた、歴史的な産物であることが見えてくる。これは、より歴史的・発生論的な視点である。この視点の切り替えによって、沖縄のイメージや政治・経済・文化を理解する際に、よりプロセスや関係性、具体性を重視する立場から見ていくことができるのである。<sup>10</sup>

<sup>10</sup> それは決して、単に現実を脱構築して相対化することで事足りりとするのではなく、研究者の立場が

ところで本論は、「知が現実をつくる」という視点を進めていく際に、ミシェル・フーコーの「エピステーメー」概念を活用する。彼の言うエピステーメーとは、特定の時代・社会の中で機能する、知のシステムのことを指す。この知のシステムは、その社会を一定方向に動かし、変容させていく力をもっている。フーコーの「エピステーメー」概念をあえて使う理由は、彼の〈知と権力の結びつき〉という視点を重視するためである。第1部で詳述する沖縄振興開発計画は、新全国総合開発計画の〈開発〉の枠組みのもとに、復帰後の沖縄を一定方向に変容させ、その空間的リアリティを新たに形作る、知の権力装置として作動していく。海洋博は、その起爆剤となる。これを記述する際に、フーコー的な視点が大いに活用できる。

ただし、本論の主眼はあくまで、沖縄社会のリアリティ変容と、その中での沖縄イメージの誕生プロセスを描き出すことにある。そのため、フーコーやブルデュー、ギデンズなど、以下で登場する論者の理論は、彼ら自身の議論を離れて、この目的に合わせて大胆に加工を施すことになる。<sup>11</sup>特に「エピステーメー」は、開発の知が交通の知・観光の知と連動し合って、沖縄の空間的リアリティを方向づけていくプロセスや、海洋博という巨大イベントが、これら3つの知を大規模に立ち上げ、急速に浸透させていく起爆剤となるプロセスを、描き出すために活用される。復帰後の沖縄社会を大きく変容させ、方向づけるという意味で、これらの知は明らかに権力性をおびていた。これを記述する際に、フーコー的な視点が応用されるのである。

また、「知が現実をつくる」という視点に関連して、アンソニー・ギデンズの「再帰性」(reflexivity 反省性)概念もたびたび登場する(詳細は4章3節)。近代社会は、たえず変動し続ける社会である。その中で人々は、知識・情報・思考をそのつどはたらかせて、新しい状況に対して再帰的に対応し、自らの行動を決めていく。近代社会のこのような側面を、「再帰性の増大」としてとらえることができる。本論は観光やイメージに関わる議論が中心になるので、再帰性の中でも特に〈美〉に関わる次元、すなわち美的再帰性の側面が繰り返し出てくることになる。

「エピステーメー」や「再帰性」といった概念は、「知が現実をつくる」という本論の基本的な視点を表しているので、これらを念頭に置いて読み進めてもらえば、議論がより理解しやすくなるだろう。

#### (8) 沖縄イメージを創り出した文化装置：沖縄海洋博

さて、〈青い海〉に代表されるビジュアル化された〈沖縄〉のイメージは、あくまで社会的・人工的に産み出されてきた、歴史的な構築物である。それは一体、いかなるプロセスの中で形成されてきたのだろうか。もちろんこれには複合的な要因が関わっているわけだが、本論ではその中でも最も大規模な形で、観光リゾートとしての沖縄イメージを創り出す機能を果たした文化装置として、1975(昭和50)年の沖縄国際海洋博覧会を取り上

---

ら、沖縄をめぐる現実の一樣相を再構成して、詳細に記述し、沖縄に対する新たな理解の地平を切り開いていこうとする態度である。

<sup>11</sup> そのため、理論的な用語を内在的に説明することは、本論の主眼からはずれ、議論を散漫にする恐れがあるので、極力省いている。こうした理論的用語がもつもとの含意をすでに前提にして、議論を進める形になっていることを、ご了承いただきたい。各用語の含意やオリジナルの議論については、各論者の著作や、その解説書を参照されたい。

げる。本論の3部構成の軸は「開発・海洋博・観光」だが、具体的には、第1部は沖縄振興開発計画と海洋博の関係、第2部は海洋博の内容分析、第3部は沖縄の観光リゾート化と海洋博の関係という形で、3部を通して、海洋博が中核的な位置を占めるようになっている。ただし、第2部は海洋博そのものを内在的に検討する作業であるのに対して、第1部と第3部は、海洋博と沖縄社会との外的な関係を問う作業であり、アプローチの仕方が異なるわけである。

ところで、海洋博に対する一般的な評価としては、沖縄県内の世論の趨勢はほぼ確定している。「日本復帰後の県経済活性化の『起爆剤』になるはずが、かえって『自爆剤』になってしまった」というものである。<sup>12</sup>また、研究者による海洋博の分析・評価も、新崎盛暉(1992)や宮本憲一(1979)をはじめ、すでに多くの先行文献があり、その多くはこうした世論と同じような評価を下している。これらは主に、海洋博と沖縄の経済開発・社会変容との外的な関係に照準を定めたものとして、学ぶところが多い。

しかし本論では、あらためて海洋博をとりあげ、より包括的な視座から検討してみたい。すなわち、これまで海洋博を扱った先行文献は、もっぱら海洋博と外部要因(沖縄の経済・社会・開発)との関係に視点を限定しており、海洋博そのものの内容に関心を向けているものはほとんどない。最近、吉見俊哉(1992)や三浦展(1999)、橋爪紳也など、博覧会の内容を深く掘り探して検討し直す営みが行われているが、沖縄海洋博に限ってはこれまで、これに類する研究は皆無に等しいのが現状であった。そこで本論は、海洋博と沖縄社会との外的な関係を問う作業と、海洋博の内容分析との両方を行うことによって、沖縄において海洋博が果たした機能を、よりトータルに見る立場から明らかにしていきたい。

沖縄の日本復帰記念イベントが、また経済振興開発の呼び水が、なぜ沖縄国際海洋博覧会という万国博覧会でなければならなかったのだろうか。博覧会やスポーツイベント(オリンピック・ワールドカップ・国体など)のようなビジュアル・イベントは、国家の政治的戦略や経済振興政策とリンクさせられ、一つの文化装置として機能するのが常である。<sup>13</sup>とはいえ、こうした文化をめぐる政治を、そのイベントの文化内容に対して外在的な観点から検討するだけでは不十分である。同時に、イベントの中身を詳細に分析することによって、文化のなかの政治の側面を、内在的に検討する作業も必要である。沖縄海洋博において具体的にどのような展示が行われ、どのような世界観が視覚化されていたのかを見ることを通して、そこにその後の沖縄の方向づけを読みとり、沖縄に関してよりいっそう体系的な理解をひらくことが可能になる。

第3章で述べるように、万国博覧会は19世紀半ば以来、新しいテクノロジーを使って視覚的なスペクタクルの空間を演出し、<未来>のイメージを空間的に体現することによって、圧倒的多数の大衆を魅了してきた。しかもそこで提示される<未来>イメージは、新しい現実を構築するためのモデルとしての機能を、実際に果たしてきた。例えば、マシンやタイプライター、蓄音機、テレビなどの展示は、その後の日常生活に取り込まれるべきライフスタイルのモデルを提示していた。また、パリのエッフェル塔やシカゴの観覧車に典型的なように、博覧会の建築物はその後の都市の一部、もしくはモデルとして機能し

<sup>12</sup> 「振興開発の落とし穴 海洋博」琉球新報社、2000、p.343～349。

<sup>13</sup> 九州・沖縄サミットを招致することによる効果も、これらと同様であった。その意味ではサミットも、政治ショーとしてビジュアル・イベント化している。

てきたのである。

それでは、沖縄海洋博はどうだろうか。その具体的な内容は、いかなる〈未来〉イメージを提示し、いかなる形でその後の〈沖縄〉イメージのあり方を方向づけ、沖縄の新しい現実を構築していくモデルとして機能していったのだろうか。本論第2部ではこの問題意識を具体的に展開し、沖縄海洋博のテーマ・基本理念・会場用地選定・空間構成・出展内容などを詳細に検討・考察していく。

ただし、こうした内容分析だけで完結してしまうのも、やはり不十分である。海洋博という巨大イベントを、特定の歴史的コンテクストのなかに引き戻していく作業も、同様に重要となる。すなわち海洋博は、復帰前後の沖縄の特定の文脈のなかでこそ立ち上がってくるという文脈依存性と、復帰後の沖縄に対して新たな文脈を方向づけていくという文脈指示性とを、ともに持ち合わせている。この点をふまえて、第1部では沖縄振興開発計画の文脈のなかに、第3部では沖縄の観光開発・観光キャンペーンの文脈のなかに、海洋博を位置づけていくことにする。そして最終的には、これらの第1部・第2部・第3部は互いに有機的な連関をなすことによって、海洋博を契機にした体系的な沖縄イメージの誕生を、より包括的な視点から明らかにすることが可能になる。

#### (9) 本論の若干の留意点

まずは形式上の留意点を挙げておきたい。先に述べたが、本論の特徴のひとつは、「知が現実をつくる」という、社会学の基本的な視点をとっていることにある。そのため、沖縄の〈自然〉〈海〉〈亜熱帯〉〈文化〉〈沖縄らしさ〉など、ふだんは当たり前のように語られている自明性をおびたカテゴリーが、次々に疑いのまなざしを向けられ、これらが歴史的・社会的な産物であることが明らかにされる。このため、日常的な自明性との切断を図る目的から、〈 〉を多用することになるので、この点を念頭に置いて読み進めていただきたい。

また本論は博士論文であるため、かなり専門的な内容になってはいるが、研究者だけでなく一般の読者をも想定して、なるべく読みやすく、わかりやすく書くことを心がけた。そのため、下線や傍点、ゴシック体などの強調も多めにして、重要な箇所・注意すべき箇所を浮き彫りにした。あくまで原則としてだが、これらの種類と使用法を明記しておこう。

ゴシック体・・・用語として重要なもの(あるいは結論的な文)

傍点・・・言い回しとして注意すべきもの

直線の下線・・・文・節として重要な箇所

波線の下線・・・文・節として注意して読むべき箇所

これらが多用され煩雑な箇所もあるかもしれないが、どうかご了承いただきたい。

ところで、本論において主要な3つの領域を構成する開発・博覧会・観光はいずれも、政治・行政・経済・産業・経営・マーケティング・地域開発・メディア・文化・レジャー・空間・環境・建築・造園など、様々な個別諸領域が関わってくる、総合的な現象である。そのため、沖縄における開発・博覧会・観光の流れを詳細に追っていく本論の議論も、必然的にこれらの個別領域とリンクし、多岐にわたってくることをご了承願いたい。本論はあくまで、特定の社会現象をよりトータルな視座から認識していく、社会学の基本的な立

場を前提している。そのため、上に列挙した個別諸領域に従事する専門業者や研究者の方々の視点と、ある程度のズレが生じる可能性も否めない。しかしながら同時に、社会学の基本姿勢やその豊富な理論的視点を導入することによって、これらの個別諸領域を関連づけるパイプ役としての役割を果たすことができれば幸いである。沖縄・開発・海洋博・観光に関して新たな理解の地平を切りひらくことによって、今後の様々な取り組みの一助となりうることを願いたい。

なお本論は、沖縄を直接の対象に取り上げてはいるが、せまい意味での地域研究の枠内に収まるものではない。沖縄研究をはじめ、国内外の地域研究に応用可能なだけでなく、開発・博覧会・観光の研究、および関連する諸領域の研究にも、一定の知見を提供できるものと自負している。本研究をひとつのケース・スタディとして、様々な研究に活用していただければ幸いである。

さらに本論は、研究者や専門業者の方々だけでなく、できるだけ広く一般の方々にも読んでいただきたいと思っている。沖縄県民や沖縄出身の方々はもちろんのこと、沖縄フリークの人たち、旅行や海、博覧会、テーマパーク、イベントなどが好きな人たち、その他少しでも関心がおありの方に、気軽に手にとってもらえれば幸いである。

#### (10) 本論の章構成

本論は、第1部「沖縄振興開発計画のなかの海洋博」、第2部「沖縄海洋博の内在的分析」、第3部「海洋博と沖縄社会の変容」の3部構成からなる。部どうしの関係については、すでに述べたとおりである。ここでは、これらの部を構成する各章の特徴について、簡単に紹介しておくことにしよう。

第1部「沖縄振興開発計画のなかの海洋博」は、2章構成である。第1章「海洋博と沖縄振興開発の歴史的前提 60年代～70年代初頭における〈国土〉と〈国民〉の再編」は、沖縄の復帰前、高度成長期の日本列島の再編制に焦点を当て、沖縄開発・海洋博・沖縄観光の前提となった諸潮流を、この時期の本土に見出す。すなわち、開発の次元は全国総合開発計画～新全総～列島改造、イベントの次元は東京オリンピック～大阪万博、交通の次元は新幹線～高速道路・モータリゼーション、観光の次元は海外旅行の自由化～「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンである。これら4次元がそれぞれ、復帰後の沖縄に流れ込んでくることを示しておく。その意味で第1章は、第2章だけでなく、本論全体の基礎となる議論である。

第2章「沖縄振興開発計画と海洋博」は、第1章をふまえ、復帰前後の沖縄における開発のエピステーメの登場・展開のプロセスを記述していく。69年11月の復帰決定を契機に、沖縄開発をめぐる日・米・琉の政治的駆け引きが行われた結果、本土政府と本土企業が主導権を握り、海洋博構想が浮上するプロセスが明らかになる。開発構想は公式化され、長期経済開発計画～新全総への組み込み～沖縄振興開発計画の流れへと結実する。これらの計画の内容を、資源としての〈沖縄〉の特徴づけや、海洋博と観光の位置づけに焦点を当てて分析していく。さらに、沖縄振興開発計画と海洋博の直接的な結びつきを表すものとして、関連公共事業を見ていく。特に海洋博道路・国道58号線が、〈沖縄らしさ〉の演出装置として整備されたことにスポットを当てる。

次に、第2部「沖縄海洋博の内在的分析」は、3章構成である。まず、第3章「〈海〉

をめぐるイメージ・ポリティックス」は、第2部の導入部分である。万国博覧会の歴史と、それがもたらしてきた様々な効果をふまえた上で、沖縄海洋博に期待された政治的・経済的効果についても見ていく。そして、内容分析の入口として、海洋博のテーマと基本理念について、詳細なディスカール分析を行う。

第4章「観光リゾートとしての〈沖縄〉イメージの誕生」は、美的リアリティや観光のまなざしに焦点を当てる立場から、海洋博の会場選定プロセスを検討する。会場地に選ばれた本部半島の海と島々は、自然の風景がそのまま会場の展示の一部として活用されることによって、決定的な象徴的変容をとげた。これが、海洋博が沖縄を観光リゾート化する装置として設定されたプロセスの、重大な様相であったことを詳述する。なお本章は、シヴェルブシュやフーコー、ドゥポールらの知見を借りて、海洋博会場の空間のなかで監視とスペクタクルが同時に成り立つようなまなざしの権力について、理論的な考察を行う章でもあり、これは第5章の基礎にもなる。

第5章「ビジュアル・メディアとしての沖縄海洋博」は、海洋博の具体的な展示内容について、より内在的な検討を加えていく。会場内のクラスター構成、政府出展・外国出展・民間出展・沖縄県出展の各パビリオンの詳細な内容分析を経て、これらの展示から、〈海〉〈亜熱帯〉〈文化〉という沖縄イメージの三種の神器が出そろってくるのが、明らかになる。

第3部「海洋博と沖縄社会の変容」は、2章構成である。第6章「復帰後の沖縄社会と海洋博世論」は、海洋博が復帰後の沖縄社会において、どのようにとらえられていたのかを見ていく。第2部で詳しく検討してきた海洋博のテーマやスペクタクルの空間は、主催者側が意図したとおりには、県民には受容されていない。むしろ海洋博は、県民世論においては終始、批判的にとらえられてきた。沖縄社会の情勢の変化とともに、海洋博世論がいかなる変容をとげていくのかを、年表とともに詳細に検討していく。

第7章「海洋博から沖縄キャンペーンへ 沖縄の観光リゾート化のプロセス」は、沖縄の観光開発・観光キャンペーンのプロセスに照準を定め、そのなかで海洋博がいかなる位置を占めていたのか、また以後の沖縄イメージや観光立県の方向性に、どのような影響を与えていったのかを探っていく。また、こうした観光リゾート化とイメージ形成のプロセスにおいては、県・政府・本土企業・広告代理店・県議会の革新与党など、様々なアクターたちの複雑な相互作用が影響してきたことも重視される。

結論「沖縄イメージによるリアリティの構築」では、ここまでの重要な論点をあらためて整理する中で、第1部・第3部の海洋博と沖縄社会との外的関係の分析と、第2部の海洋博の内在的分析とを関係づける作業を行い、全体の総括とする。

謝辞 序章の執筆に当たっては、早稲田大学の土屋淳二氏と大正大学の澤口恵一氏にアンケートの実施をご協力いただき、大いに参考になった。ここに感謝の意を表したい。アンケートに答えてくださった大学生・大学院生のみなさん、ありがとうございました。

また、琉球大学法文学部の2001年度開講科目「社会学研究（文化社会学）」の受講生の皆さんとの議論も、大いに参考になった。ここに感謝の意を表したい。